



ハッブル望遠鏡が見た宇宙

野本陽代, R. ウィリアムズ 著

岩波書店 (新書版), 212 頁, 定価 940 円

解説書

お薦め度
☆☆☆☆☆

その、あっと息を飲むほどの美しい写真の表紙に魅せられて、書店で思わず手にした方も多いのではないと思う。それほど「ハッブル望遠鏡が見た宇宙」は、その表紙の写真ばかりでなく、私たちに宇宙の無限の美しさと未知の姿を次々と繰り出して見せてくれる。

どれもこれも、ウーン！と唸らずにはいられないくらいの美しい 100 点以上もの写真から構成されているこの本には、著者の一人である野本さん特有の、天文学者に対する優しい眼差しを感じさせる口調で、易しい言葉による大変分かりやすい解説が一つ一つについて書かれている。一般の読者をこれほどまでに惹き付けている理由がここにあるのだろう。

「これは本当に写真なの？ 画家の手による精緻な想像図じゃないの？」と思ってしまうくらいの「ハッブル・ヒット・ナンバー」には、完全に魂を奪われ、心は遠く宇宙の果てまでさすらって行き、現実の世界を忘れてしまう。また、身近な太陽系内の事件の数々とその謎を解く鍵、星形成から超新星爆発、初期宇宙まで。たとえ天文学の研究者であっても、ちょっと専門が違うと、もう全くの別世界になってしまうような不勉強な私には、最新の成果にフムフムと頷き、楽しみながら知識を吸収できた気になるにはもってこいである。

こんなに素晴らしい成果をあげているハッブル望遠鏡であるが、打ち上げ当初は、予期せぬトラブルのため、十分にその能力を発揮できなかったことは周知の事実である。しかし、その後の関係者の不屈の精神による並々ならぬ陰の努力については、これまであまり表立っては知られてこなかったかもしれない。大きく割かれたページには、望

遠鏡の修理のための舞台裏が詳細に描かれている。ハッブルの撮った写真よりも何よりも、私が一番感動し、涙腺がゆるんだ章である。どんなに科学技術が発展しようとも、最後は人間の頭と手に敵うものはないのだ。実に多くの、宇宙を知りたいという共通の夢を持った人々の努力の集積によって、ハッブル望遠鏡はその持てる能力を最大限に発揮することができ、そしてさらにパワー・アップした。アメリカの科学者や技術者、そして宇宙飛行士たちの層の厚さには圧倒されるが、我々も負けてはいけない、と、発奮させられる。一般の人々に、天文学の苦勞を垣間見ていただけるにはもちろん最適であるが、天文学の研究者にも必読の書と言っていだろう。

一般に写真集といえば重くて値段が張るものが多いのだが、この新書版はいつでもどこでも持ち歩け、気軽に好きなページをめくることができる。また、子供から専門家まで誰にでも楽しめる。

私が本書を買ってウキウキと帰宅し、本書をテーブルの上に置いておいた所、4歳と2歳の子供たちが目ざとく見つけて早速二人で手に取り、すっかり魅せられて本を離さず、一枚一枚の写真に驚きの喚声をあげていた。私が読もうとした時はすでにボロボロになっていたのだった…

ハッブル望遠鏡が打ち上がるまでの苦勞から、Hubble Deep Field を始めとする最新の成果までをふんだんに盛り込んであるこの一冊は、その物理的重さ以上のずっしりとした重みを、読む人に感じさせてくれる。毎日の会議に拘束され、あるいは日々実験で忙しく、夜空を見上げる心のゆとりのないあなた、一服の心の清涼剤はいかがですか？

油井-山下由香利 (早稲田大理工学部)